石瀬貝塚 市指定史跡

縄文土器

縄文時代中期（約5500～4400年前）の貝塚です。遺跡は伊勢湾に注ぐ矢田川支流の前山川に臨む、知多丘陵の支丘の傾斜地に立地しています。1958年に発掘調査がおこなわれ、多数の縄文土器のほか、長野県で産出する黒曜石でつくられた石鏃や、埋葬人骨、ハイガイやハマグリなどの貝殻、イノシシやシカなどの動物骨が出土しています。これらの出土遺物は当時の環境を知るうえで貴重なものです。

狐塚遺跡

製塩土器

狐塚は、田の神様を祭る祭場として築かれました。田の神様の使いである狐がこの付近に棲んでいたことから、この名前が付きました。狐塚がつくられた年代は明らかとなっていませんが、伝承では奈良時代の頃といわれています。狐塚遺跡からは古代の塩づくりに用いられる製塩土器や中世の陶片などが見つかっています。製塩土器の制作年代から、最も古い資料が５世紀の終わりごろで、８世紀に最盛期を迎えたことが分かります。

籠池古窯 県指定史跡

1959年、愛知用水建設工事にともなって発掘調査が行われました。籠池古窯の周辺には多くの窯が築かれていましたが、見学できる場所はこの窯跡のみです。籠池３号窯は1125～1150年頃に築かれた窯で、甕、短頸壺、山茶碗、小碗などが生産されました。知多半島には3000基以上の窯が築かれたといわれ、籠池古窯は甕を焼いた最初期のものと考えられています。

仏涅槃図 国指定重要文化財

仏涅槃図は、二月十五日、古代インドの拘尸那竭羅城郊外の沙羅双樹の下で、釈迦が八十歳の生涯を終えて入涅槃する様子を表しています。宝床台の上には、右手枕で目を閉じ、西向きで横になっている釈迦を他の人物よりもひときわ大きく描き、その周りには九人の弟子が泣き悲しんでいます。上空には釈迦の母、摩耶夫人の一行が、阿那律に先導されて忉利天から降臨する様子を描いています。

右から二番目の沙羅双樹の右には、「明州江下周四郎筆」と墨書があり、中国浙江省の港湾都市として知られる寧波が「明州」と呼ばれていた南宋時代前期（12世紀末）に制作されたと考えられます。この仏涅槃図の裏には、天文二十一（1552）年当時、常滑市大野町の宮山に所在していた金蓮寺に伝来したもので、現在は石瀬にある中之坊寺の什物の一つとなっています。

十王堂の宝珠瓦

十王堂は、地獄の閻魔王をはじめとする、十人の冥府の王が祀られたお堂です。創建年代は不明ですが、大野にある東龍寺の過去帳によれば、天正六（1578）年にはすでに存在していたことがわかっています。最近までみられたお堂は弘化二（1845）年に建立されたものです。間口は３間（4.4ｍ）、奥行３間（4.4ｍ）、二重屋根宝形造、桟瓦葺、唐破風向拝付の立派な造りです。屋根の頂部にあった宝珠瓦には、天保十五（1844）歳、松原村（現知多市松原）の瓦師定介の銘が刻まれており、約180年前につくられた瓦だということがわかりました。

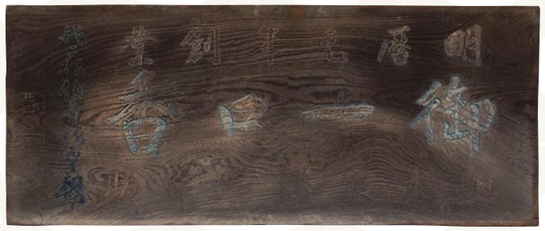
大野鐙

尾張の鍛冶集団は、鎌倉時代初頭に近江の国辻村（現滋賀県栗東市）の鍛冶職人が伊勢を経て大野へ移り住んだことに始まると伝えられています。享保十五（1730）年の記録には、大野鍛冶職人が185人に達しており、武具や馬具、舟具、農具など様々な鍛冶製品の需要があったと考えられます。本作の舌裏に「尾州大野住藤原重久作」の銘があります。制作年代のある作品はほとんどみつかっていません。作品の形状から江戸時代の中でも新しい時期と考えられます。

あやつり人形の首　市指定有形民俗文化財

大野の内宮御斎宮社に納められていたものです。現在確認できるものは36個あり、明治初年頃まで内宮祭の際、境内で小屋掛けをして浄瑠璃にあわせて踊らされていました。首を納めた木箱には、「寛政九（1797）年丁巳六月砂若」、「京都富小路角磯屋六兵衛より尾州大野あさや宗四郎様」とあります。このことから、江戸時代後期の庶民性をうかがうことのできる貴重な作品です。

一口香の看板



大野名産の一口香は、小麦粉と米飴で練り上げ、なかに黒砂糖を入れて焼き上げた甘さひかえめのお菓子です。明暦元（1655）年、湊屋初代茂助が創案したといわれています。当初は、「芥子香」と呼ばれていましたが、二代尾張藩主徳川光友（1625～1700）が称賛し、「一口香」と呼ばれるようになりました。湊屋は2005年に閉店し、看板は陶の森に寄贈されました。

とこなめ陶の森
資料館
企画展

大野の文化財

とこなめ陶の森 資料館